

# ある同志社台湾校友のライフヒストリー<sup>1)</sup>

河口 充勇

KAWAGUCHI Mitsuo

## 1 はじめに

日本統治期（1895～1945年）の台湾では、植民地体制下における高等教育機会の不足という事情を背景に、多くの若者が故郷を離れ日本の各地へと留学した。当時の台湾留学生にとって同志社は最も重要な受け入れ校のひとつであった。すでに故阪口直樹氏の著書『戦前同志社の台湾留学生—キリスト教国際主義の源流をたどる』（2002年）によって明らかにされているように、トータルで700名を越える台湾留学生が戦前の同志社で学び、そのなかからは台湾の様々な分野で活躍するローカル・エリートが多く輩出されることになった。近年、上記の阪口氏の著書、そして、筆者も報告者の一人である国際シンポジウム『植民地教育、日本留学與台湾社会—紀念林茂生先生国際学術研討会』（2002年9月19日、於国立台湾大学）などの影響もあって、台湾と同志社との間の歴史的つながりが改めて注目されるようになっている。本稿では、戦前に同志社で学んだ台湾留学生の特徴を概観したうえで、同志社台湾校友の象徴的人物というべき故陳誠志氏<sup>2)</sup>（1916～2004年）のライフヒストリーを記述する。

## 2 戦前の同志社と台湾留学生

戦前の同志社（大学・大学予科・専門学校・高等商業学校・中学・女子専門学校・高等女学部を含む）では、数多くの台湾留学生が学んでいた。その総数は、学籍名簿をもとにした阪口氏の整理によれば、同志社全体で714名にのぼり、当時の

全留学生数（1,464名）の49%（朝鮮留学生が46%、中国留学生が5%）を占めた。そのピークは、1920年代半ばから1930年代半ばにかけての時期であり、そのころには最も多いときで40～50人の台湾留学生が同志社に在籍していた（阪口2002：42-3）。

当時の同志社においてこれほどまでに台湾留学生が多かったのは、まず何より当時の台湾における不平等な教育システムというプッシュ要因によっている。1990年代末に台湾で出版され大きな話題になった新しい中学歴史教科書によれば、「台湾では進学が容易ではなかったため、台湾人の有志青年は勇躍日本へ赴き留学した。1945年までに日本に留学した学生は合計で20万人におよび、そのなかで大学や専門学校の卒業生の総数は6万余人に達した。医学を学んだ者が最も多く、法律、商業、および経済を学んだ者がそれに次ぐ。留学は台湾での教育の不足を大きく補った」（台湾国立編訳館編2000：91-92）。終戦直後の台湾の総人口が600万人程度であったことを考えれば、20万人という数は驚きに値する。上沼（1978）によれば、1920年代半ばごろの台湾留学生の行き先としては、東京が圧倒的に多く、それに次いで多かったのが京都であった。受け入れ校としては、国公立よりも私立が圧倒的に多かった。そのなかでも明治が際立って多く、それに次いで多かったのが早稲田、慶応、中央、同志社であった（上沼1978：148）。そうした戦前の台湾留学生の多くは、当時の台湾ではごく一握りの裕福な地主層や商家の出身であった（上沼1978：

148-154)。

同志社での台湾留学生第一号は、1905年に同志社普通学校（旧制同志社中学の前身）2年次に編入学した周再賜氏<sup>3)</sup>（1888～1969年）であり、『同志社百年史—通史篇（一）』（P569）にも彼に関する記載がある。周氏は、受け入れ体制も確立せず、困難な学習・生活条件のなかで刻苦勉励し、普通学校を卒業した後、同志社大学神学部に入学した。大学卒業後はアメリカに渡り、オペリン大学やシカゴ大学で学んだ後、ニューヨークのユニオン神学校にて博士号を授与された。帰国後は同志社大学助教授に任用され、さらにその後は群馬の共愛女学校に移り、40年間にわたって同校の校長を務めた。阪口（2002）によれば、「周再賜が同志社に入学し、無事に卒業を果たしたことが、一般の台湾人に知れわたったため、台湾人が子女の多くを京都や内地の学校に送るようになった」（阪口 2002：12-3）という。

実際、周再賜氏以降、数多くの台湾留学生が同志社で学ぶことになった。初期の台湾留学生のなかで特筆すべき人物としては、林茂生氏<sup>4)</sup>（1887～1947年）や陳清忠氏<sup>5)</sup>（1895～1960年）の名をあげることができる。林氏は1908年に同志社普通学校に入学し、卒業後は第三高等学校を経て東京帝国大学（中国哲学専攻）に進学し、1916年に台湾人で最初の文学学士となった。帰台後、彼は母校である台南の私立長老教中学<sup>6)</sup>の教頭に就任し、その後、いったんアメリカの大学院に留学した後、同校の理事長に就任した。そうした林氏の個人的な影響もあって、長老教中学から多くの学生が同志社に留学することになった。一方、陳清忠氏は1912年に同志社普通学校に入学し、卒業後、同志社大学文学部英文学科に進学した。1921年に帰台した彼は母校である台北近郊の私立淡水中学<sup>7)</sup>の英語教師になり、その後、同校の校長に就任した。やはり淡水中学でも、陳氏の個

人的な影響により、多くの学生が同志社に留学することになった。そうしたパイオニアたちが掛け橋となり、彼らの後、700名を超える台湾の若者が同志社の門をくぐることになった。

では、そうした戦前の台湾留学生はどのような特徴を示していたのだろうか。第一に、同志社大学（大学予科・専門学校・高等商業学校を含む）で学んだ者より同志社中学（現在の同志社高等学校・中学校の前身）で学んだ者のほうが圧倒的に多かった、ということである<sup>8)</sup>。学籍名簿をもとにした阪口氏の整理によれば、戦前に同志社大学で学んだ台湾留学生の総数は126名（朝鮮留学生が325名、中国留学生が12名）であったのに対し、同志社中学で学んだ台湾留学生の総数は547名（朝鮮留学生が248名、中国留学生が37名）であった。その547名のうちの大多数は同志社以外の高等教育機関（特に多かったのが医科系）に進学し、80名のみが同志社大学に進学した（阪口 2002：30-3）。

第二に、ある特定の私立中学、すなわち先述の長老教中学と淡水中学から同志社中学に編入学する者が圧倒的に多かった、ということである。阪口（2002）によれば、戦前に同志社中学で学んだ台湾留学生547名のうち251名が両校の出身者（長老教中学出身者が141名、淡水中学出身者が110名）であった（阪口2002：36-7）。では、なぜ長老教中学と淡水中学の学生たちはわざわざ中途退学して同志社中学に編入したのだろうか。この点は戦前の事情を振り返るうえで非常に重要であるので、その背景について簡単に振り返る。日本植民地期の台湾においては、いくつもの公立中学が設置されていたが、そこでは概して日本人子弟の入学が優先されたため、長老教中学や淡水中学に代表される私立中学が台湾人子弟（主として富裕層の子弟）の重要な受け皿となった。しかしながら、両校は30年代末まで台湾総督府の認可を

受けていなかったため、両校の学生は卒業後に上級学校受験の資格を得ることができなかった。認定を受けるには、日本人を校長にする、10万円以上の基金を準備するなどの厳しい条件をクリアする必要があった。それゆえ、上級学校進学希望者は2年次あるいは3年次時点で内地の中学に編入する必要に迫られたのである。こうして、両校からの留学生は1920年代初頭から増えはじめ、1930年代初頭にピーク（25名）を迎えた。その後、数は徐々に減少し、1940年にはついに0名になった。そのように1940年に両校からの留学生が完全に停止したのは、1938年に台湾総督府が両校を認可したことにより、もはや内地の中学に行く必要がなくなったからである（阪口 2002：84-90）。

第三に、卒業後に医師や実業家の道に進む者が多かった、ということである。長老教中学卒業生名簿をもとに、阪口氏が留学生の卒業後の進路を整理したところ、同志社中学を卒業した後に日本各地の医学関係学校に進学した者が非常に多く、また、同志社高等商業学校（現在の同志社大学商学部の前身）に進学した者も比較的多かった。こうした傾向は、先にあげた歴史教科書のなかの記述からもわかるように、当時の台湾のローカル・エリート全般にいいえたことである。阪口（2002）によれば、「長老教中学在校生をはじめとする比較的裕福な台湾家庭の子弟は、日本の厳しい差別的構造のなかで、相対的に自由な活動が可能であった自由業－医師と商業に選択の目を向けた」（阪口 2002：88-9）のである。

第四に、男性が圧倒的多数を占めた、ということである。阪口（2002）によれば、戦前に同志社で学んだ女子留学生総数は166名で、そのうち台湾女性は40名であった（朝鮮女性が104名、中国女性が22名）。その40名の内訳は、同志社高等女学部（現在の同志社女子高等学校・女子中学

校の前身、5年制）で学んだ者が16名であったのに対し、同志社女子専門学校（現在の同志社女子大学の前身、3年制）で学んだ者が24名であった（阪口 2002：38-41）。つまり、戦前同志社の全台湾留学生（714名）に占める女性の比率は5%程度にすぎなかったのである。

第五に、在学中にキリスト教に入信した者が多かった、ということである。『同志社教会員歴史名簿』（1995年刊）をもとにした阪口氏の整理によれば、戦前に同志社でキリスト教に入信した留学生106名のうち47名が台湾留学生（その多くは同志社中学で学んだ者）であった。戦前の台湾留学生の間では、キリスト教徒として入学するわけではないが<sup>9)</sup>、授業や日常生活にキリスト教の活動が入り込んでおり、教師たちに感化されてキリスト教徒として卒業していったケースが多かったようだ（阪口 2002：42）。

最後に、世代的には、戦前における同志社の台湾留学生数のピークが1920年代半ばから1930年代半ばにかけての時期であったことからして、20世紀の最初の10数年間に生まれた世代が最も多かったであろうということである。

以上のように、戦前の同志社台湾留学生の間では、同志社中学で学んだ者が多く、長老教中学・淡水中学という特定の学校（特別裕福な家庭の子弟が通う私立中学）から来た者が多く、医師や実業家になった者が多く、在学中にキリスト教に入信した者が多く、男性が圧倒的に多く、そして、世代的には20世紀初頭の生まれが多かった。そうした当時の台湾留学生のなかからは、医学界、キリスト教界、教育界、音楽界、スポーツ界、実業界など様々な分野で指導的役割を果たしたローカル・エリートが数多く輩出されたのである。

### 3 陳誠志氏のライフヒストリー

以下では、戦前に同志社で学んだ台湾留学生の

一人である陳誠志氏のライフヒストリーを振り返る。

### 3.1 幼少期

陳誠志氏は1916年に台北の南西に位置する桃園県亀山郷で誕生した。陳家は当地の地主であった。陳氏が7歳のころに父親が桃園の町に出て卸問屋の事業をはじめたため、幼い陳氏は父母とともに桃園の町に移った。

桃園の小学校を卒業後、陳氏は親元を離れ、先述の淡水中学に入学した。

「淡水中学では寮に入った。キリスト教の学校だけれど、信仰を強制されることはなかった。自由な学校だった。……僕の家族は仏教関係だから、その影響を受けて、洗礼を受けなかった。家庭の事情が許す限り、クリスチャンになる人もいたけど、うちは家族がうるさいから洗礼しなかった。でも、牧師さんのことはよく知っているし、気持ちもいっしょだから、お祈りもする。牧師さんのところに行くと、『僕の娘をもらってくれんかな』とよく言われたものだ(笑)」。

淡水中学時代、陳氏は淡水中学と同志社との間の掛け橋となった陳清忠氏や陳能通氏<sup>10)</sup>といった同志社OBの教員の影響を少なからず受けたようである。3年次を終えた時点で、陳氏は、先輩諸氏の勧めもあって、日本へ留学するという選択肢をとることになった。

「先輩にも同級生にも日本に行ったのがたくさんいたから、迷わなかった。淡水中学に入ったころから、近い将来、僕も日本に行くもんだと考えていた。家族も僕の決断に反対しなかった」。

### 3.2 同志社での日々

1934年、台湾を離れた陳氏は同志社中学に編入学した。

「中学のころは百万遍に住んでいた。そこに入

舟館という下宿屋があってね、もうないけど。台湾人は僕しかいなかった。友人は日本人が多かったね。台湾人の友達もいたけど。僕は全然お酒を飲まないし、真面目なほうだった。スポーツはあまりしなかった。本屋に行くのが何よりの楽しみだった」。

「学校の先生はよく可愛がってくれたね。中学の時の受け持ちの先生、軍人だった人がね、『陳君は成績良いし、冬は寒いから、三学期は台湾に帰っていい』と言ってくれてね(笑)。だから、僕は二学期までしか勉強してない。雪の降る寒いときは京都にいなかった。寒さが怖いから。本当によく可愛がってくれた」。

「当時の同志社中学には『自励会』という会があって、台湾の先輩たちが作ったものだけれども。僕はこの会の会長をやった。……だいたいみんな集まる。長老教中学の人も淡水中学の人もみんな集まるわけだ。僕がいたころは30何名かな。僕がいたころが一番多い時だな。……そういう会は中学だけ。中学は台湾留学生が多くて、集まりやすいから。中学を卒業したら、この会とは関係なくなる。……でもね、そういう会に入ると、いろいろうるさいんだ。僕はね、その会の会長をやっておった関係でね、何度か特務に呼び出しをくらったわけだ。それから、台湾の基隆港に着いた船から上がる時に、『同志社の陳誠志』と呼び出されてね、特務がまた来るわけだ。たまたまその中に同志社出の人がいてね。すぐ仲良しになった。同じ同志社の人だから、僕の気持ちをよくわかってくれる。その特務の方は終戦後に日本に引き上げたけれど、それから良い付き合い。台湾に来たこともある。彼は僕のことを一目置いてくれていた」。

「僕には朝鮮人の良い友達もいたけれど、一般的には台湾留学生と朝鮮留学生はうまくいかないね。彼らは日本語を絶対使わない。韓国に行つて

日本語使うと敬遠される。台湾とは違うね」。

「日本で差別された経験は無いね。とても親しくしていた。同じもんだから、気持ちがいっしょだから。みんな仲良いや。学校の外でも、そういう経験は無いね。あんまり人と関わることもないからね。僕はわりと真面目な生活をしてきたから」。

1936年、同志社中学を卒業した陳氏は同志社高等商業学校（同志社大学商学部の前身）に進学した。陳氏によれば、当時の同志社高商は非常に人気があり、卒業後の就職に関しては同志社大学よりも良かったという。

「他の学校に行くつもりは全くなかったね。同志社中学の成績がよければ、推薦でいける。楽だからね。それでいいやって」。

「そのころは将来の夢とかあんまり考えなかったね。とにかく勉強したい、本を読みたいと。家業を継がなければならぬとは思ってたけど、まだまだ軽い気持ちだった。それに、戦時だったからね、毎日学生部隊が出てくる。ほとんど毎週京都駅に見送りに行っておった。だから、将来の夢どうのどころじゃない。自分の国がどうなるかわからなかったからね」。

### 3.3 帰台

1939年、同志社高商を卒業した陳氏はすぐに台湾に帰った。

「戦時だから帰らざるを得ない。ほとんど毎日、徴兵された学生が出生するのを見送りに行った。幸い僕は徴兵されなかった。僕が日本にいたころは、まだ台湾人は徴兵されなかった。その後、戦争が猛烈になって、台湾人も徴兵されるようになった。その時に李登輝さんなんかも徴兵された。彼は淡水中学の後輩。……日本での就職は全く考えなかった、危ないからね。親に早く帰らんと危ないからと言われてね。高商からは無試験

で同志社大学に編入できたわけだけど、もう二年で大学が卒業できたわけだけど、やっぱり危ないからね」。

帰台後の陳氏は父親の事業を手伝うことになった。彼の父が興した桃園物産は主に日本製の飲料や調味料、雑貨、ガソリンなどを取り扱う卸問屋であった。

「会社の規模は大きかったね。当時、桃園には卸売業者が二軒しかなかった。両者は競争関係にあった。うちがエビスビールなら、あちらはキリンビール、うちが三ツ矢サイダーなら、あちらは何か別のものという具合に。……うちは輸入元ではない。輸入は辰馬商会という大きな日本の会社がやっていた。そういう総元の会社が一手にやっておって、その手を通してうちにやってくる」。

桃園物産は卸売だけでなく製造も行っていた。

「父から味の素の製造をやりなさいと言われた。それで日本に行っているいろいろその製法を学んだ。そして、台湾ではじめて味の素をつくったわけだ。原料や機械は大阪の会社から輸入した。しかし、それはうまくいかなかった。一時はよく売れたが、長続きできなかった。日本の味の素が大量に入ってきて、もうそれでだめだった」。

また、陳氏は、家業に従事しながら、当時、台湾の官報（日本語）である「台湾日日新報」や飲食品製造業界の業界誌（日本語）である「飲食品新聞」の記者も務めていた。

くわえて、陳氏は、第二次大戦末期には桃園の小売商統制組合の運営にもかかわった。

「終戦近くになると、すべての物資が統制されるようになる。僕は一切の物資を扱った。すべて僕の手を通らなければ配給されない。その時、僕は27歳くらいだったけれど、その地方ではちゃんと学校を出ているのは僕一人ぐらいなもんだから……。あの時はたいしたもんで、すべての物資

を僕の一存でどうにでもできるわけだから」。

当時、桃園郡の郡主は同志社 OB の日本人で、台北同志社倶楽部（同志社校友会台湾支部の前身）のアクティブメンバーの一人であった。陳氏は、その人物の推薦で桃園小売商統制組合の仕事に携わるようになった。陳氏がある会合で彼に遭遇したとき、彼は陳氏の背広の襟元に付けられた同志社のバッジを見ながら、「あんた同志社か。引っ張ってやる。いつでも遊びに来い。僕も同志社で学んでね、あんたが来てくれてとてもうれしい」と言った。また、陳氏が台湾に帰省する際に基隆港で出会った同志社出身の特務は、陳氏がそのポストに就く際に「陳さんなら間違いなし」と強く推してくれたという。

「先輩からいろんなことを聞いて、いろんなことを注入されるわけだよ。校風というもののありがたみというのをね。そういう時代ですよ。……同志社を出たおかげで、他人よりは知識も持っているわけだ、一人の青年としてね。それに、官報の記者だから、思想も良いわけだ（笑）。あの当時の思い出が楽しいわけだ、歳いってからね。……僕はわりと真面目で、よく認めていただいた。それは同志社のおかげですよ」。

1942年、陳氏は結婚した。夫人は彼より7歳年少で、やはり桃園近郊農村部の地主家庭の出身であった。陳氏によれば「日本語がうまくてね、こんな上品な人がいるのかとびっくりした」とのことである。

### 3.4 戦後初期の紆余曲折

第二次世界大戦終結により家業の桃園物産は大打撃を受けた。

「終戦後は雑貨の間屋が統制されてしまって、桃園物産は商売をやれなくなった。親父は大きく商売をやっておったね。終戦後、いろいろ銀行の金を借りたけど、結局は倒れてしまって。それ

で、大きくやっても潰してしまっただけでは意味がないと思うようになった。冒険はやらん方がいいと。自分の力でやった方がいいと」。

そのときの教訓は、その後の陳氏の実業家人生に対して非常に大きな影響を与えたようである。

戦後初期、陳氏は、傾きかけた家業を支えながら、「公論報」という民間の新聞社で記者（桃園支局長）を務めた。同紙は、終戦直後に国民党政府によって接収された「台湾日日新聞」の社長に就任した人物が新たに立ち上げた新聞である。

1947年に起こったいわゆる2・28事件<sup>11)</sup>のころには陳氏も厳しい状況に置かれた。

「2・28事件の時は危なかった。日本関係の仕事をやってたからね。家の天井にいっぱい本を隠した。それから、昔のクラスメートが北支やらフィリピンやらから、いっぱい日本語で手紙をくれるんだ、軍事郵便でね。こんなのも見つかる困るからね、その方の奥さんに送り返した。……2・28事件の時には同志社 OB もたくさん殺られた。その一人が淡水中学の陳能通校長、僕も教えてもらった」。

そうした緊迫した状況下において陳氏は自己防衛という目的のために中国民主社会党という政党に入党した。

「僕はね、国民党とは違う、別の党に入っているね、大事な役をもっている。民主社会党という党。戒厳令の時代、蒋介石が認めた党は、国民党以外には二つしかなかった。中国民主社会党と中国青年党。僕はね、民主社会党の主席をやったことがある。……戒厳令ずっと40年やってたけど、その時からね、民主社会党と青年党は国民党の“友の党”だった。二つの党しか許さない。他はすべて秘密結社。……民主社会党というのはもともと中国からやってきた。僕は1949年に入っている。というのはね、僕はそのころ桃園にいたけ

ども、しょっちゅう国民党の人間が訪ねて来て、怖いからね。何度も入らんかと言ってきたけど、『いやあ、ちょっと考慮させてくれ』と言っついてね。国民党は地方のリーダーたちにだいたい入ってくれと言っつてたみたい。でも、怖いからね。これではいけない、どっかに入らなければいけないと思っつて、それで、民主主義の党だから、そこに入った。そのおかげで国民党はもう何も言っつてこなくなっつた。……だから、僕は党内では古いわけだ。……民主社会党では主席は一人だけじゃなく、十何人かで主席団というのをつくっつて、何事も主席団で解決する。そのころはね、台湾の人間は僕一人だけで、主席を3年くらいやっつたかな。今でも中央の常任委員をやっつている。……民主社会党では中国人が多かっつたね。その中にはスパイも入っつてた。台湾の人もちょっと入っつてるけど、みんな監視されつてた。でも、そこに潜り込まないと、国民党が入っつてくれと言っつてくるからね。向こうはたっくさんの人間を吸収したいわけだ』。

### 3.5 台湾電気会社の経営

1954年、陳氏は、主にオーディオ機器やレコード、補聴器などの輸入業務を行なう台湾電気公司を立ち上げた。同社のオフィスは、台北随一のオフィス街である中山北路に設けられた。同社はその分野ではパイオニアであり、小規模ながら一貫して業界トップの地位を守つてきた。同社が扱うオーディオ機器は、主に欧米と日本（特にシャープ）で製造されたものである。補聴器の製造元は主に日本企業である。補聴器は、陳氏がその輸入をはじめる以前には台湾ではまったく普及していなかつた。

陳氏のビジネスの特色は、銀行からの融資を受けず、自己資金で操業するということである。

「うちは保守的でね、あまり大きくやらない。やっつたらしくじるから。気をつけて、自分の資金

だけでやる。だから、銀行の連中はいつも『陳さんは儲けさせてくれない』とほやいてる。僕の方針は、必ず儲けの良いのをねらつて、なるべく自分の資金でやるということ。利息が恐ろしいからね。絶対利息を負わない。だから、大きくやらない。それが方針。だから、しくじらない。……銀行の金は絶対使わん、みんな珍しがるね。……創業の時もすべて自分の資金。親戚からも借りない。頼母子もやらない。あれは危ないから。巻き上げて逃げるのがいっぱいいる。僕もあれで一度ひどい目にあっつたことがある。誘われることは多いけど』。

「創業当時の社員は20数人。一番大きかっつた時で30人程度かな。今は8人。昔の社員は今ほとんどみんな社長。僕が鍛えて、独立して。今でもみんな親しいね。補聴器をやっつてるのもいるし、オーディオをやっつてるのもいる。みんな成功してるとる。僕の関係で10何人いるね、大きい会社やっつているのが。喧嘩別れしたの一人もいない。みんな感謝してくれてる、台湾電気のおかげだとね。彼らにはいつも『固くやれ、固くやれ』と言っつてきた（笑）』。

「社員は、自分から望んで、この会社に憧れて来た者の中から選り取る。最初のころの社員は、社員の紹介によるのが多かっつた。桃園の人間もいたけど、それ以外のところのもいたね。社員には同志社の関係者は全然いなかつた。取引相手も同志社の関係はほとんどいない。一人僕のクラスメートで電気関係の仕事をやっつてる人がいたけど、ほとんど関係がなかつたね』。

「他のビジネスに手を広げようという気にはならなかつたね。というのは、自分のブランドをもつてるのだけで精一杯。しかも、僕は銀行の融資はやらん、自分のできる範囲内で固くやっつてるから。うちは業界トップで、マーケットを占領してるとるからね。うちしかない。量は限られてる、大

きくやっちはいけない。それで精一杯。暇があったら、外国へ旅行に行く（笑）。

「若いころも会社を大きくしたいと考えたことはないね。それでまちがった人を何人も知っている。成功してる人間はみんな政府の役人と組んで銀行から金を借りてる。で、潰れたら外国に逃げる。とても多い。大きいところはみんないっぱい金借りてる。大きくやらん方がいい。……僕みたいのは少ないね。僕はあまり大きい欲をもちたくない。たくさん金を借りて大きくやって、そんなものよりもね、まず自分の気楽な生活をやる方が、外国へ旅行に行く方がよっぽどいいわけであってね（笑）。最初のころからそう思ってたね。大きいことをやる必要はない。自分としては、大きな風呂敷の中身のないものより、小さくてもしっかりしたものの方がいいと思う」。

「そうやるとね、もちろん、損なこともあるよ。たとえば、アメリカの会社は銀行から金借りてない会社を信用しない。大きいところは、たくさん金借りている、だから信用あると考える。そういう損なところもある。それでもいいから、僕は僕の方針でいく」。

陳氏のビジネスは、彼の堅実な経営ポリシーもあって創業以来一貫して順調に展開してきた。1970年代という台湾の転換期（国際社会からの孤立）においても、陳氏のビジネスが大きな方向転換を強いられることもなかった。「国交は断絶されたけども、商売関係は別。商売のハンディキャップはない。もちろん、関税関係でね、ラジオの完成品は入れてはいけないとかあって。だから、できないならば、部品の一部だけを日本から入れて、別の部分を台湾で作らせて、いっしょにして出す。日本の会社のマークを付けて」。

1980年代末、それまで台北の大学で教鞭をとっていた次男が、陳氏の強い要望もあって、彼の跡を継いだ。

「それはもう否応なしにね。長男は医者なので、継いでくれるとしたら次男だけ。僕がやってきた古い会社だからね、継いでもらいたかった。それに、もっと旅行に行きたかったし（笑）」。

それ以降、会社の経営は基本的に次男が主導してきたが、ただし、広告関係だけは陳氏が一貫して担当してきた。

「今まで広告はみんな自分でやってきた。社員の頭より鋭いからね、経営主だから。自分が長いことやってきたことだから、自分が一番よくわかる。勘もよく働く。自分の趣味もあるし」。

陳氏の経営ポリシーは、彼の跡を継いだ次男にも受け継がれている。

「次男も銀行から金を借りない。我家の方針。古い会社だからね。次男にはあまり積極的に新しいのを切り開いていこうという気はなさそうだ。最近、次男はよく中国に行ってるけど、あまりそういうことはやらんほうがいいね。危ないから。今のところ、あちらに工場を建てたり、あちらでものを売ったり、あちらのものを輸入したりする計画はないね」。

### 3.6 台湾と同志社の架け橋

そうした企業経営のかたわら陳氏は長きにわたって台湾と同志社の架け橋の役割を果たしてきた。陳氏は、1951年の同志社校友会台湾支部の立ち上げ以来一貫して支部の運営を支え、1985年～2001年の期間には支部長を務めた<sup>12)</sup>。同志社校友会の機関紙である『同志社タイムス』の542号（2000年2月15日）では、校友会台湾支部の歴史を振り返る陳氏（当時支部長）の支部通信が掲載されており、そこには次のような記載がある。

「私が、まだ学生だった頃の、1936年8月25日、同志社高商野球部は、全国専門学校野球大会優勝の勢いを駆って、台湾遠征を企てた。その時



分は『台北同志社倶楽部』が、接待に当たっていた。終戦後、中国側が軍勢で執権してから間もない、1951年頃、校友の一部有志によって、クラス会程度の集まりだったが、これらの会員を組織的に系統化して、当支部が誕生された。……そのときは、厳戒下に在って、紆余曲折を嘗め、そして、活発な活動はなかった」(原文のまま)。

そのように校友会台湾支部が“紆余曲折”を嘗めることになった背景には、左翼団体を想起させやすい「同志社」という名称が部外者に対して悪い印象を与えてしまったという事情があった。その時期において、校友会台湾支部は政府当局からの正式許可を得られず、表向き親睦会の形をとっていた。実際、陳氏によれば、1951年の台湾支部発足時においては政府当局ににらまれるのを承知で支部長のポストを引き受ける者がおらず、1958年に高天成氏(台湾大学附属医院院長)がそのポストを引き受けるまでの約7年間、校友会台湾支部には支部長が存在しなかったという。陳氏は当時の校友会台湾支部が置かれていた境遇を次のように述懐している。

「昔は認められた政党が3つしかなかった。……あのころは政治活動が許されない。だから、何か同志社関係で集まったら、警察が我々を注意している。僕も警察の呼び出しを受けたことがある。戒厳令はうるさい。幸い僕は国民党の“友の党”の人間だから、だいじょうぶ。そのおかげで、同志社の集まりもできたわけだ」。

1950年代末ごろになると、台湾の政治情勢も幾分安定し、台湾校友と同志社との交流が再開されるようになった<sup>13)</sup>。陳氏の支部通信には次のような記載がある。

「1961年12月2日、柔道使節団一行十七名は、二十四時間続いて、全島各地で巡回試合の為、往訪されたのが切っ掛けとなって、年々、両国文化交流、若しくは、親善を目的で順々と、野

球部、登山隊、宗教部、射撃隊、音楽部、マンドリンクラブ、ゼミ学生等の諸団体、乃至、学苑の首脳、恩師、教授、此外、役職員、OB個人らが、日華国交断絶に至る迄の間、頻々と連続していた」(原文のまま)。

1970年代初頭になると台湾をとりまく国際政治の雲行きが怪しくなり、1972年にはついに「日華国交断絶」という事態に陥った。そうして台湾校友と母校同志社との間の交流が再び困難になってしまった。それから10年近く経過した1970年代末ごろには情勢が幾分好転し、両者の間の交流は再び活発化した。先の陳氏の支部通信には次のような記載がある。

「1979年になり、男性合唱団(再訪は1990年)を皮切りに、復と、ラグビー部(其他、香里高校)、野球部などの歴訪があった」(原文のまま)。

1980年代後半になると、陳氏と同じ淡水中学の卒業生である李登輝総統のリーダーシップの下で台湾は急激な民主化を遂げることになり、もはや「同志社」という名称が悪しきものと誤解されるようなこともなくなった。その時期には、同志社に留学する若い世代の台湾人が増加<sup>14)</sup>すると同時に、台湾に駐在する同志社卒業生も増加し、そうして、陳氏が長年にわたって支えてきた校友会台湾支部の活動も活況をみせるようになった。

2001年末に筆者が行なったインタビューのなかで陳氏は自らの人生における同志社の意味を次のように語っている。

「同志社で学べて本当に幸せだったと思う。そのおかげでたくさんすばらしい経験をし、すばらしい人と出会い、恵まれた人生を送ることができた。その恩返しだと思って、お金の面では何の得にもならない校友会の仕事をずっと一生懸命やってきた。楽しいことばかりではなかったが、しかし、この歳になって改めてやってよかったと思っている」。

そのように帰台後の彼は同志社校友会の発展に尽力してきたが、それはまさに彼流の「ノブレス・オブリージュ」の実践であったといえよう。

### 3.7 晩年

陳氏夫婦は5人の子と10人の孫に恵まれた。筆者がインタビューを行なった2001年末時点で彼の子・孫たちは台湾、アメリカ、日本の各地に散らばっていた。陳氏の長男は台湾の大学で医学を学び、台湾で医療に携わった後、1980年代末にアメリカ・カリフォルニアに移住し、現在、同地にて病院を経営している。移住の際には同志社OBであるアメリカ在住日本人医師のサポートを受けた。長女は兄に続いてアメリカに移住したが、夫（台湾出身）の仕事の関係で台湾に帰ってきた。次男はアメリカの大学で経済学博士号を得た後、しばらく台北の大学で教鞭をとっていたが、先述のように、1980年代末に台湾電気公司を継いだ。次女は夫（台湾出身）の事業の関係で1980年代末ごろに日本に移住し、後に帰化した。陳氏の三女は兄・姉の後にアメリカに移住した。

晩年の陳氏は夫人とともに本宅のある台湾・桃園と長男家族の住むアメリカ・カリフォルニアとの間を行き来しながら、世界各地への旅行を楽しむという悠々自適な生活を送っていた。戦後の台湾では、多くのエリートが海外（特にアメリカ）へ移住してきたため、そのような陳家の事例は決して特殊なものではない。

「アメリカにはたくさん台湾人がいる。我々の子どもの世代には、アメリカに留学して、そのまま向こうに留まったのが多い。だから、僕のような爺さんは決して珍しくない。それは、(長期的な政情不安という)不幸な歴史のなかで起こったことだけれど……、家族が離れ離れに生活するのは寂しいことだけれど、しかし、悪いことばかり

というわけでもない。これだけあちこちに家族が散らばっていることは、考えようによっては、チャンスでもあるわけだから……」。

## 4 おわりに

以上、故陳誠志氏のライフヒストリーを振り返った。80余年におよぶ長い人生に秘められた興味深いエピソードのすべてをこのように限られた紙幅のなかで包括することはそもそも不可能であるが、とはいえ、以上の記述作業により、日本統治期の台湾における同志社への留学がどのようなものであったのか、そして、戦後の台湾における同志社校友の置かれた境遇がどのようなものであったのか具体的に明らかになったであろう。

それを通して見えてきたのは、陳氏の事例が、単に同志社台湾校友という特定集団の代表的事例であるに留まらず、いっそう広く“日本語世代”のローカル・エリート（日本統治期に高等教育を受けた人々、李登輝前総統もその一人）の置かれてきた境遇を考えるうえでも大いに代表性をもちえる、ということである。陳氏のような日本語世代のローカル・エリートは、植民地体制下での高等教育機会の不足という事情を背景に日本へ留学した。帰台後には若くして重要な職務に就き、大いに将来を嘱望された。しかし、戦後になると外来者主体の独裁政権下で長期にわたり微妙な立場に置かれた（なかには白色テロの犠牲になる者もいた）。“擬似植民地”的というべき環境において、政治権力の庇護をあてにすることなく、企業経営者として、あるいは医師に代表される専門職従事者として、自助努力を第一とする生活を送ってきた。そこでは、子弟を海外へ留学・移住させることが多くの場合において“政治的保険”確保のための自助努力を意味した。そうした日本語世代のローカル・エリートの存在は、感情論やイデオロギーを越えて考えてみると、非常に興味深い

ものであり、台湾近現代史を再考・再構築するうえで絶好の研究対象であるといえるだろう。

〔注〕

- 1) 本稿は、2001年～02年度に同志社大学文学部社会学科社会学専攻で開講された「社会調査実習－同志社と台湾留学生」（担当者：森川貞規雄教授）の成果の一部である。筆者は同実習にティーチング・アシスタントとして参加し、調査立案から報告書作成にいたる調査の全過程を通して履修生の指導に当たった。その成果は、「2001年度社会調査実習報告書－同志社と台湾留学生」ならびに「2002年度社会調査実習報告書－同志社と台湾留学生2002」として出版されている。
- 2) 筆者は2001年12月末に台北で陳誠志氏に対してインタビューを行なった。インタビューは日本語で行なわれた。本稿で紹介する陳氏のライフヒストリーはその折のインタビュー内容を基にしている。
- 3) 周再賜氏については、阪口（2002：12-26）を参照。
- 4) 林茂生氏については、阪口（2002：48-55）を参照。
- 5) 陳清忠氏は、同志社在学中にラグビー部員として活躍し、帰台後、淡水中学で台湾最初のラグビーチームを結成した。彼が亡くなって8年目の1968年、台湾ラグビー協会は、彼を記念した「清忠杯」を設けた。彼は今でも台湾の多くの人々の間で「台湾ラグビーの父」として記憶されている。陳清忠氏については、阪口（2002：63-8）を参照。
- 6) 長老派の牧師によって創立された私立学校。現在の名称は私立長榮高級中学。
- 7) やはり長老派の牧師によって創立された私立学校。現在の名称は私立淡江高級中学。李登輝前総統は同校の卒業生である。
- 8) 同志社中学は1896年の創立当初から公立中学との競争にさらされ、また徴兵令による退学者の増加に悩まされたため、1910年代には厳しい財政状況にあった。しかし、1920年代になると状況が好転し、生徒数が増えはじめた。当時は大学の学生数と中学の学生数は拮抗しており、同志社内における中学への財政的比重は大きかった（阪口 2002：35-6）。大学でより中学で学んだ台湾留学生のほうが多かったのは、そうした背景とも関係している。
- 9) 戦前においてキリスト教を学ぶために同志社に入

学した台湾留学生はあまり多くなかった。阪口（2002）によれば、戦前の同志社で神学を学んだ留学生（44名）のうち台湾留学生は5名にすぎず、それに対し朝鮮留学生は37名と圧倒的に多かった。そのように同志社で神学を学ぶ朝鮮留学生が多かったのは、朝鮮では同志社と同じ組合派が優勢であったからであり、逆に、台湾留学生が少なかったのは、台湾では教派の異なる長老派が優勢であるため、日本で神学を学びたい台湾人は長老派系の日本神学校や明治学院に入学したからである。

- 10) 陳能通氏（1899～1947）は、淡水中学から同志社中学に編入した後、熊本第五高等学校を経て、京都帝国大学で学んだ。卒業後は、母校淡水中学に戻り、そこで教鞭を執った。
- 11) 終戦当初、台湾住民の多くは台湾の中華民国への復帰を「光復」として歓迎した。しかし、外省人（戦後初期に蒋介石とともに中国大陆から渡台してきた人々）ばかりが優遇された新政府では汚職がはびこり、行政が効率を欠いたため、物価が高騰して不景気となり、また、治安も急激に悪化した。そうして、本省人（台湾籍の人々）の間で政府ならびに外省人に対する不満が急激に高まり、1947年の2・28事件でそれがピークに達した。1947年2月27日、台北の煙草・酒類専売局の密売取締官が密輸煙草の調査過程において抵抗する民衆を殺傷した。翌日、そうした官吏の態度に憤慨した群衆たちが政府に対するデモを執行したが、その際に群衆側に多数の死傷者が出たため、群衆の怒りはもはや收拾がつかないまでに爆発した。そうして、全島規模で政府に対する反抗ならびに本省人による外省人の虐殺が起こった。その後、各地の知識人は進んで処理委員会を組織し、政府に対し抜本的な体制改革を要求した。緊急事態に直面した政府は軍隊を動員し、各地で反抗運動を徹底的に弾圧した。その結果、各地でおびただしい数の犠牲者が出た。この事件以降、台湾では赤狩りと称した白色テロが横行し、罪のない本省人が多く虐殺された。
- 12) 陳氏以前の歴代支部長には、台湾大学附属医院院長を務めた高天成氏（1904～64年）、レストラン経営者にして台北市政府秘書をも務めた林金殿氏（1910～78年）、台湾省政府建設庁長、中日文化経済協会理事、国営台湾肥料公司理事長、中華民国行政院顧問などを歴任した宋江淮氏（1904～95年）の3名がいた。
- 13) そのあたりの事情については、同志社校友会発行

の『同志社タイムス』171号（1966年4月15日）に掲載された加藤延雄氏（元同志社中学校長）の通信文「訪日記・上」からうかがい知ることができる。「私の先輩にも友達にも台湾の人があったが、私が教えた台湾学生の方が遥かに多い。然し太平洋戦争がはじまり、海上交通が危険になると台湾学生はほとんど絶えた。終戦後は日台双方とも大変動があり、つづいて台湾は共産側と抗争のため戦時体制を固めたので兵員たるべき青少年の国外渡航を極度に抑え、海外留学を希望しても行先国学校の入学許可証がなければ出国を許さないことになった。また、経済的自立のために台湾からの送金や貨幣持ち出しを強く抑えた。そして同志社の方でも戦前とは事情が変り、入学試験を受けて合格しなければ入学許可書は出せないことになった。こうして同志社と台湾との関係は殆ど絶えて二十数年、何とか昔のように台湾子弟にも同志社教育を受けさせたい。その方法を教えてくれとの要求が高まってきた。昭和三十年頃になると日台両国とも安定の度が進み、同志社にもたまには台湾の校友が訪れてくるようになった」（原文のまま）。この文章は、1966年2月に台湾校友の招きで加藤氏が訪台した直後に書かれたものである。その文面にもあるように、第二次大戦末期から戦後初期にかけての時期には、単に新たな台湾留學生が同志社に来なくなっただけでなく、戦前に同志社を卒業し台湾に帰った校友と母校との交流も途絶えてしまった。しかし、昭和30（1955）年ごろから母校を訪問する台湾校友が少しずつ増え、また、この加藤氏をはじめ、何人もの同志社の教職員・卒業生が台湾を訪れたため、台湾校友と母校との間の交流が再開されるようになった。以上の加藤氏の記述や、同じく『同志社タイムス』に掲載されたその他の台湾校友関連記事から推測

するに、戦前に同志社を卒業した台湾校友の間では、その当時子弟を母校に通わせたいと願っていた人が非常に多かったようであるが、しかし、当時の台湾の不安定な政治情勢（個人の海外渡航に対する厳しい規制）からして、それは容易なことではなかったようである。

- 14) 第二次世界大戦末期から1970年代にかけての時期には、同志社における台湾留學生は皆無に等しかったが、1980年代以降には、日本側における留學生受け入れの拡大、そして、台湾側における経済発展ならびに都市ミドルクラスの形成といった事情を背景にして、日本へ留学する台湾の若者が急増し、同志社で学ぶ台湾留學生の数も増えることになった。同志社大学の国際課ならびに各学部事務室に保存されていた入学願書や学籍名簿をもとに戦後の同志社台湾留學生の来歴を調べ、さらにその結果を校友会台湾支部の名簿とつき合わせてみたところ、2001年度までの段階で68名の戦後留學生の存在を確認することができた（68名という数はあまり正確度の高いものではないが、しかし、どう多く見積もっても戦後留學生総数が100名を超えることはありえない）。その内の圧倒的多数は1980年代以降に来日した者であり、6名のみが1970年代末に来日した者であった。そうした戦後の同志社台湾留學生の特徴としては、全員が大学・大学院で学び、特定の学校出身ということはなく、卒業後に日系企業に入る者が多く、宗教色が非常に希薄で、女性が過半数を占め、そして、世代的には1960年代後半の生まれが多い、といったところである。こうした戦後（1980年代以降）の同志社留學生のなかからは、急激にグローバル化する台湾経済の最前線で活躍するビジネスマン・キャリアウーマンが数多く輩出されたのである。

#### 【参考文献】

- 上沼八郎, 1978, 「日本統治下における台湾留學生—同化政策と留學生問題の展望」『国立教育研究所紀要』第94集。  
 駒込武, 2003, 「台湾における『植民地的近代』を考える」『アジア遊学』第48号。  
 阪口直樹, 2002, 『戦前同志社の台湾留學生—キリスト教国際主義の源流をたどる』白帝社。  
 戴國輝, 1988, 『台湾—人間・歴史・心性』岩波書店（岩波新書）。  
 台湾国立編訳館編, 2000, 『台湾国民中学歴史教科書—台湾を知る』雄山閣。  
 若林正文, 1997, 『台湾の台湾語人・中国語人・日本語人』朝日新聞社（朝日選書）。